

【歴史・民俗】

## 「あゆちの世界」序論

日本福祉大学 名誉教授

日本福祉大学知多半島総合研究所 顧問 福岡 猛志

### はじめに

尾張の歴史や文学に関心を寄せる者にとって、「あゆち潟」というのは、極めて親しい名前である。

また「あゆち潟」への関心は、歴史・文学の世界だけのものではなく、この地方で活動する文化団体や社会的組織が、自らの名称に「あゆち(潟)」を付けることも、しばしば見受けられる現象である。

さらに、愛知県という県名が、「あゆち(潟)」に由来すると指摘されること<sup>(1)</sup>もあって、それは、文化的雰囲気表現するだけでなく、この地の歴史を背負うことを意味する場合もある。

このような、歴史性・地域性を意識する動きは、県内においては、たとえば、「穂の国」を称揚する例などに顕著に表れているが、「あゆち(潟)」の場合には、幾分、あいまいさがあるように思われる。<sup>(2)</sup>

『万葉集』の中の二首、「あゆち潟」歌の解釈・鑑賞にとっては、その場所がどこなのかが問題となる。勿論、そのことを検討するためには、当該時代の、当該地域の地理学的状況の認識が必要となる。

具体的には、海岸線の特定が問題となろう。この点では、1959(昭和34)年の伊勢湾台風被害が、「結果として」ひとつのデータを提供することとなった。多くの犠牲者を出し、永年の人々の営みを烏有に帰すという大被害の裏面として、心複雑なものがあるが、大洪水の浸水状況は、それまでの調査・分析の結果を、ある部分では追認し、ある部分では訂正を求めつつ、過去の海面(現在では陸地化している)を現出させたのである。

「あゆち潟の復元」にあたって、伊勢湾台風の浸水範囲が参考にされるのは、現在でも有効な方法である。

さらに、考古学的調査・研究による知見の蓄積も見べきものがある。それらを踏まえた「あゆち潟」範囲論は、文学論・歴史論の根拠としても、またそれ自体の研究としても、さまざまに提起されている。<sup>(3)</sup>

文学作品の鑑賞にとって、場所の確定が意味を持つと述べた。考古学研究の場合にも、遺跡の状態が海岸の位置を定めるのに重要であるとともに、逆に、地理的環境との関係で遺跡の性格を論定することにもなるから、細かい検討が必要である。

そのことを確認した上で、敢て私が論じたいと思うのは、細部を超えて、全体としての(それは、どこからどこまでが「あゆち潟」なのかという視点とは異なる)「あゆち潟」と、それ

を囲繞する地域としての「あゆち」の世界の具体相である。そもそも「あゆち潟」とは何なのか。それは、知多半島の古代史を検討する上でも、意味を持つ問いである。

本稿は、そのような課題に向うための、予備的考察に過ぎない。

## 1 「年魚市方」＝「あゆち潟」であること

周知のごとく、『万葉集』には、「年魚市方」を詠んだ歌、次の二首が収められている。

A 桜田部 鶴鳴渡 年魚市方 塩干二家良之 鶴鳴渡 (巻3—271)

B 年魚市方 塩干家良思 知多乃浦余 朝榜舟毛 奥尔依所見 (巻7—1163)

この「年魚市方」が尾張の地名であることについては、異説はない。知多は尾張国の郡名であるし、『和名抄』によれば、尾張国愛智郡に作良郷が存在し、桜田が、作良＝桜の地の田であることは容易に想定できる。作良郷の故地は現在の名古屋市南区の桜台・桜本町・西桜町一帯(名鉄本線「さくら」駅近辺)に比定され、定説となっている。「年魚市方」は、知多からも桜田からも遠からぬ位置にある「干潟」「塩干にけらし」として詠まれる対象である。

また、Aは、「高市連黒人覇旅歌八首」の中の一詩であり、大宝2年の持統上皇の三河行幸に従駕した際の作品と見れば、尾張国における実景、あるいはその記憶にもとづくものと見て無理はない。

さらに言えば、『日本書紀』(景行51年紀)に、草薙剣が「今在尾張国年魚市郡熱田社也」とあって、「年魚市方」と不可分の関係にある地名と考えられる「年魚市郡」に熱田社が鎮座していることも明らかである。「年魚市方」は、熱田社からも近い位置にある。

さて、この「年魚市方」は、「あゆち潟」と解される。

まず、「年魚」を「あゆ」と読むことは、『和名抄』が、「鮎」について「和名安由」とした上で、「崔禹食経云貌似鱒而小有白皮無鱗春生夏長秋衰冬死故名年魚也」と説いていることで確かめられる。「春生夏長」以下の文章が、『崔禹食経』の記述の引用なのか『和名抄』の地の文なのかによって、多少のニュアンスの違いがあるが、「鮎」が「安由」であり「年魚」であることに変わりはない。なお、『和名抄』が、「楊氏漢語抄云銀口魚又云細鱗魚」としている点も、後述の『日本書紀』との関係で、留意しておきたい。ここでも、細鱗魚が、『楊氏漢語抄』の記述なのか、「又云」がそれとは別の典拠があることを述べているのかははっきりしないが、いずれにせよ、細鱗魚が鮎であるという解釈を妨げるものではない。

念のために確かめると、『万葉集』においては、「あゆ」は、「年魚」の他に、「阿由」「安由」「鮎」という表記が用いられている。字音を借った表現、文字の意義による訓、事物の性格にもとづく「義訓」の三通りが見られるのである。

『日本書紀』では、著名な「吉野の鮎」の童謡(天智10年12月癸酉条)の場合には、「曳之弩能阿噓(えしぬのあゆ)」とする他に、神功皇后即位前紀では、「細鱗魚」(『和名抄』に見えることは既述)および「年魚」、応神19年10月戊戌朔条では「年魚」としている。『古事記』の神功皇后の段でも、「年魚」である。

さらに『風土記』の場合も、出雲・常陸・豊後・肥前のいずれも「年魚」である。古代において、

「年魚」は、鮎を表わす一般的な用法だったのである。「年魚市方」は「あゆ市方」である。

ところで、「鮎」は中国語の本義では「なまず」を意味する。『諸橋大漢和辞典』、『大字源』をはじめとする漢和辞典を引いてみると、「鮎」は「鰻」とも表記され、「鮎 魚無鱗 哆口 豕類 長須多次」(六書故)、「方頭 大尾 小身 滑無鱗 謂之鮎魚 言黏滑也」(爾雅翼)などと説明されている。すなわち「鱗がなく、方頭で口や頬が大きく張っていて、長いひげがあり、小身で尾が大きく、ぬるりと滑る」魚である。

『和名抄』では、「本草云鰻魚(中略)蘇敬注云一名鮎魚」とするが、これが「なまず」であるという認識はないように思われる。

笹原宏之氏は、本義では「なまず」を意味する「鮎」字を「あゆ」にあてたのは、漢字に別義があることをふまえての意図的な転用——中国製漢字のもつ字義を日本に引伸・派生させたり、転用させて用いた——なのか、日本での造字——既存の漢字を知らずに日本で文字を製作した——が、たまたま漢字の中に存在した同形のものと衝突したのか、不明であるとしている。<sup>(4)</sup>

ちなみに、「鯰」(なまず)は日本での造字すなわち国字である。

「年魚市」が「あゆち」であるのに対応して、「方」は「潟」である。先に掲げた二首は、ともに「あゆち潟 塩干にけらし」と読めるから、「あゆち潟」は、潮の干満によって干潟をなしていることがわかる。そのことに問題はないのだが、「潟」については、柳田国男氏の論<sup>(5)</sup>があるので、若干触れておくことにする。

そもそも、「潟」というのは、「塩分を多く含んだ土地」を意味する中国語であって、鹹湖にあてる語法もある。柳田氏は、「全体ガタに潟の漢字を宛てたのが古人の誤りかと思う」と言っている。そして、「カタ・ガタ」という語は、東西の海岸において意味の差異を生じたもので、東海岸で言う「カタ」は干潟を意味し、日本海海岸では「ガタ」は平地の湖を意味する。その湖は海に近く、海とガタとを隔てるのは幅の狭い砂浜で、水が海と通っている例が多いので、英語のラグーンに宛ててよい語であるというのが、柳田氏の主張である。

この説明は、少しわかりにくい。「ガタ」は、平地の湖一般を意味するのか、その中でも一定の状態をなしている(ラグーンにあたる)ものだけを意味するのか。地域による意味の差異は、「分岐」なのか「派生」なのか。後者の問題については、以下の論述によって、日本海海岸のそれが本義で、東海岸のそれは派生したものとしていることがわかるが、その論証はなされていないように思われる。

柳田氏の主張は、以下のごとくである。

「干潟という語は古くからあるから東海岸でいうカタの方が本来の意味だということかも知れぬが、干潟はすなわち潟の干たのをいい、むしろただのカタの乾いておらぬことを証する。それを理由とするのは、白熊という語があるから熊は白いというと同じき無茶だ。」

この語源問題は、それとして論じられるべきものであろうが、本稿の目的からすれば、深入りする必要はない。潟の本義・ガタの本義如何にかかわりなく、東海岸の通例として「カタ」が干潟であることが確認できればよい。

『万葉集』では、「潟」とのみ言って、「干潟」を指す例は、他にも見出される。

潮干れば 共に潟に出で鳴く鶴の(巻7—1164)

というのは、潮が引いた、その場所が潟であるのだから、潟は干潟をなしているのである。

潮満ち来れば 潟を無み(巻6—919)

潮が満ちて来たから無くなる潟とは、干潟に他ならないであろう。

一見、卓抜に見える「白熊」の例は、それが熊の中の特定の一例ということであるから、干潟が潟の中の一例にすぎぬことを前提とする。潟が干潟の約めた表現である場合、あるいは、潟の特性を端的に形容するものとして、「干」がある場合には、事情が異なるであろう。

柳には、多種があるが、柳色と言え、白みを帯びた青色(『広辞苑』)であり、青柳というのも、特殊な柳を指すというよりも、柳の形質を強く表現するという用例があるのではないか。白樺についても同様であろう。歌謡曲の歌詞にもあるではないか(「青い芽を吹く柳の辻に」「樺の木のほの白き影も薄れ行く」)。

## 2 母音連続の回避

平川南氏は、「年魚市・吾潟市」と「愛智」の関係について、次のように述べている。

『倭名類聚抄』には、愛知県の県名の由来である「尾張国愛智郡」という郡名が見える。一方、『日本書紀』ではこれを「年魚市郡」、「正倉院文書の山背国計帳(徴税台帳)では住民の逃亡先として「尾治国鮎市郡」と記している。いずれも鮎(年魚)の字を用いており、愛智(ai-chi)を鮎市(ayu-ichi)とあてている。古代の日本語には、母音の連続を回避し、二母音の片方を省くという傾向がある。この ayu-ichi の場合もこの u-i の二母音の u を省略し、アイチと読ませたのであろう。(ルビ省略)」<sup>(6)</sup>

これとほとんど同じ文章が、『中日新聞』1998年5月28日夕刊に掲載されていて(「出土文字から地名を読む 上」)、これが、平川氏の年来の所説であることが確認されるのだが、実は一点、「愛智(ai-chi)を鮎市(ayu-ichi)とあてている」という部分が、旧稿では「鮎市＝年魚市にあてている」となっていたという違いがある。些細な問題のように思われるかも知れないが、「と」と「に」では、意味が全く逆になってしまうのである。平川説の眼目は、鮎市を「アイチ」と読んだというところにあるわけだが、後者ならば、「鮎市はアイチと読むのだから、それに愛智という文字をあてる」となる。前者の場合には、「アイチである愛智に、鮎市という文字をあてている」と読める。アイチを表わすのに、わざわざ鮎市を用い、母音脱落の仕組みによって、それをアイチと読ませるというまわりくどい状態を想定することになる。

ともあれ、鮎市がアイチと読まれるのであれば、「あゆち潟」論も異なる様相を呈することになるのだが、古代文字研究の第一人者たる平川氏の説くところであるから、無視するわけにはいかない。

私は、注(2)の拙稿において、平川説否定論を述べたのだが、平川氏の新稿に接して、念のため、私見の再検討を試みることにした。平川氏が、別見解を公表しているとすれば、私の文献渉猟の不徹底をお詫びせねばならないが、私としては、「年魚市方」はあくまでも「アユチガタ」であり、「鮎市」と「愛智」の関係は、行政地名表記原則の制定に伴う転用

であるという結論を再確認することとなった。

平川説に接したことは、この問題を考察する契機となったが、目的は平川説の否定にあるのではなく、より積極的に「あゆち」論に接近することにある。

さて、アイチ・アユチを論ずるためには、連続する二母音の片方が、どのような場合にどのような形で省かれるのかが明らかにされなければならない。

つまり、「二母音の片方を省く」というのは、複合語の後項の語頭が母音音節である場合には、その母音か、前項の最後の音節に含まれる尾母音のどちらかが脱落するという意味なのだが、その脱落は全く恣意的に起こるものなのか、そうでないのか。そうでないとするれば、どのような原理・原則に則って生じる現象であるのかを明らかにするということである。

ここで言う原理・原則は、自然現象の中にひそむ法則とは異なり、言語という人為が作り出す現象についてのものであるから、絶対にそうならねばならぬというものではなく、あくまでも傾向の問題である。

この点については、岸田武夫氏によって、古代語の実際が精査され、帰納法的に明らかにされた「法則」がある。<sup>(7)</sup>さらに、橋本進吉氏が、岸田説を前提として、それに改定を加えて定式化したもの<sup>(8)</sup>があって、大野晋氏によれば、次のようにまとめられる。<sup>(9)</sup>

複合語の後項の語頭が母音音節である場合は、一方の母音が脱落する。この場合は原則として前項の末尾の音節の母音が脱落する。

ただし、後項の語頭の母音が、前項の末尾の母音より狭い母音である場合は、後項の語頭の母音が脱落することがある。

この定式によれば、「年魚市」(ayu-ichi) が (aichi) となるのか (ayuchi) となるのかは、「原則」からは前者、「ただし」からは後者が導かれる。通常の場合、「原則」に例外があることによって「ただし」が生じれば、「ただし」が優先されるが、ここでは「ことがある」というのであるから「そうでないこともある」のであって、その弁別の手がかりが求められるのである。ところが、この結論は、実際の在り方から帰納された「傾向」であって、絶対的な基準を持たない。

いずれとも判明していない未知の話が「ただし」に該当するかの指標が、実例を離れて存在するわけではないのである。とすれば、これは「傍証」に拠るしかない。

傍証とは言うものの、『万葉集』の「年魚市方」をはじめ、『日本書紀』の「年魚市郡」「吾湯市村」、『正倉院文書』の「鮎市郡」をどう読むのかを推定させる同時代史料は存在しない。しかし、私は、歌枕としての「年魚市潟」に注目しなければならないと思う。とりあえず『新編国歌大観』によって確かめておこう。

まず、「万葉歌」をそのまま採ったものとして、

#### ○『和歌初学抄』

あゆちがたしほひにけらしちたのうらにあさこぐふねもおきによるみゆ

さくらだへたづなきわたるあゆちがたしほひにけらしたづなきわたる

#### ○『綺語抄』

あゆちがたしほひにけらしちたのうらにあさこぐ船もおきにある見ゆ（傍点は福岡）

○『古今和歌六帖』

あゆちがたしほひにけらしちかのうらにあさこぐ舟のおきによるみゆ（傍点は福岡）をあげることが出来る。さらに

○『夫木和歌集』では、

「あゆちかた 年魚市方 紀伊」とし、万葉の歌として

あゆちかたしほひにけらしちたのうらにあさこぐふねもおきによるみゆ  
をあげ、次いで舟を詠んだ「中務卿のみこ鎌倉」の作として

あゆちかたあさこぐ舟のほのほのとちたのうらべに浪よするみゆ  
夕立を詠んだ「平政村朝臣」の作として

なみのうへに夕立すれどあゆちがたくももかからぬうらのとほ山  
という二首を並べる。さらに後段においては、「覇旅万三」の題のもとに（この万三は、  
万葉集卷三の意味である）、「高市連黒人の作」として

さくら田へたづなきわたるあゆちがたしほひにけらしたづなきわたる  
に続けて、「家集 鶴」として「権僧正公朝」の作

あゆちがたしほみちぬらしさくらだのほむけの風にたづなきわたる  
を列記する。

この『夫木和歌抄』の構成は、それとして興味深いもので、「あゆちがた」はまず「本歌」を掲げ、それに続けて典型的な「本歌取り」のそれを掲げ、次に歌枕としての「あゆちがた」を本歌から離れて詠んだものを並べる。後段の「さくらだ」の歌は、「本歌」と「本歌取り」の並記である。

以上で明らかのように、『万葉集』における「年魚市方」は、「あゆちがた」として受容されたのであって、「あいちがた」ではなかったのである。なお『夫木和歌抄』は、「あゆちがた」と「ちたのうら」は、紀伊国の歌枕として扱っている。その関連で言えば、当然のことながら「さくらだ」も紀伊国とみなされる。「あゆちがた」は、本来の場所を離れて「ひとり歩き」をはじめめる。そして、歌枕の通例として、「しほひ」という情景を観念すれば、それは何処であっても構わないということになる。念のため、その姿をかいま見ておこう。

あゆちがたしほひにけらしゆふさらずあそぶちどりもこゑのどかなり（『宝治二年百首』）  
ゆう波のたゆたひ見ればあゆちがたしほひのゆたにちどりなくなり（「同」）

あゆちがたしほひにたてるくら鶴のこゑは霞にまがはざりけり（『林葉和歌集』）

あゆちがたしほひの浦を見わたせば春の霞ぞ又たちける（『新続古今和歌集』）

「あゆちがた」が、知多や桜田と結びついた「尾張のあゆちがた」であることが意識されているかどうかは判らない。しかし、「牡丹に唐獅子・竹に虎」のように、「あゆちがた」は「塩干」と不可分である。典型的・代表的な干潟と認識されていたのである。

歌枕と並んで注目されるのが、『万葉集』諸写本の訓である。今日に伝来する諸本において——影写本等によって直接に確かめることが出来なかったので、『校本万葉集』によったのであるが、それで確かめた限りでは——「年魚市」に「アイチ」の訓を付したのは、「神田

本」のみであって、他は「アユチ」と訓じている。このことは、旧稿においても述べたところであるが、その後、片山武氏も、神田本のみが「アイチカタ」と読んでいると指摘している。<sup>(10)</sup>

片山氏は、『校本万葉集』にいう神田本が、紀州徳川家に伝承した紀州本であることを述べ、その解説をしているが、同論稿には、紀州本の「高市連黒人覇旅歌八首」部分の写真版が掲載されており「アイチカタ」の傍訓を確かめることができる。それによれば、片仮名の傍訓に濁点はなく、本文は「方」の字が欠落して「年魚市塩干二家良之」となっている。

『万葉集』それ自体の伝承過程において、「年魚市方」は、基本的に「あゆちがた」だったのである。

さらに、もう一点補強しておきたい。『尾張国熱田太神宮縁記』という史料がある。<sup>(11)</sup>

この史料については、論ずべきことが多くあり、本稿において後述する点もあるが、「阿由知何多 比加弥阿祢古」という「風俗歌」が記されている。これは、「あゆち潟 氷上姉子」だと思う。新井喜久夫氏が、これを「あゆち県(あがた)」の約まったものと考え、「あゆち潟」であることを否定していることについては後述するが、その場合でも「あいち」ではなく「あゆち」であることに変わりはない。

念のために付言しておきたい。『万葉集』において「年魚市方」は二首であるが、「年魚道」を歌う一首がある。

小治田之 年魚道之水乎 間無曾 人者挹云 時自久曾 人者飲云(下略)(巻13—3260)

というのがそれで、岸田武夫氏は、この「年魚道」と「尾張国吾湯市村」(『日本書紀』神代上)の対比を以て、『万葉集』中の「湯湯石」——「由由志」、「水咫衡石」——「水乎都久思」、「相市乃花」——「阿布知乃波那」とともに、尾母音[u]の後の母音音節[i]の脱落例としたのである。<sup>(12)</sup>

この「小治田之 年魚道」については、契沖以来の尾張説があつて、それならば、「吾湯市」「年魚市」「鮎市」などは「年魚道」(「あゆち」あるいは「あゆぢ」と訓むべきことになるのだが、飛鳥説もまた有力であつて、その場合には、「年魚市」=「あゆち」の直接的論拠にはならない。

沢瀉久孝氏は、「小壑田ノ坂田ノ橋」「小治田宿祢……壑開小治田鮎田」の指摘(井上通泰)、「阿由谷」「鮎谷」の存在にもとづいて、「桜井市の高家の高台の西麓、高市郡飛鳥村八釣方向」との提言(奥野健治)を踏まえて「あゆ田 あゆ道 あゆ谷」と三つまで揃っていることから、「確実な事は云へないが、大体飛鳥の東の溪谷に近いところに名水があったと見てよい」と論じている。<sup>(13)</sup>

しかし、この論に対して、なお異論が存在する。すなわち、松田好夫氏は、この歌の「人は汲むといふ」「人は飲むとふ」という伝聞的表現に留意し、「もし飛鳥時代飛鳥地方にあるならば、直接的表現『人は汲みける』『人は飲みける』とならなければならない」と指摘し、「歌の表現自体が明らかに大和説を拒否しているといえよう」と主張する。そして飛鳥地方の「実地踏査」によって、その主張を補強し、「阿由谷」「鮎谷」の「あゆ」は、「あゆ田」「あゆ道」「あゆ谷」というような田もあり、道もあり、谷もある地域の名ではないとする。飛鳥説の否

定が直ちに尾張説とはならぬことを認めつつ、尾張の小治田連葉の在住を傍証として、尾張説の復権を主張した。<sup>(14)</sup>

加藤静雄氏は、伝聞表現は、歌われてた場所とある程度の距離を要求しているものであるが、この歌は大和地方で歌われたものであることから、大和説は「歌自体が否定している」と、松田説を補強している。<sup>(15)</sup>

一方、飛鳥説に立つ伊藤博氏は、「巻13『相聞』の地名の状況から推して、尾張の地名の歌があるべくもな」と断定している。<sup>(16)</sup>

地名考証においては、それぞれにそれなりの論拠がある。そして、一方は「歌の内容」、他方は「歌群の構成」によって、互に相手を否定するというのが、この論争の構造である。

伝聞表現論について言えば、類想歌の検討をふくめ、時空の両面にわたって、伝聞的表現可能な範囲を、『万葉集』全体に即して確認する必要があるだろう。

巻13の「相聞」の歌群は、その末尾に、摂津、伊勢、紀伊の歌が並ぶ。伊藤氏は、ここでは、地名の次第に配慮がなされているという判断のもとに、それ以前の歌を「大和の国」と一括する。その構成論はかなり有力だと思うが、当該歌についての、万葉編者の認識と、実際に歌われた対象とのずれがありうるかも知れないということは、考察する必要はないのであろうか。

「年魚道」の解釈についても、一言述べておきたい。『岩波古語辞典 補訂版』によれば、「道」は「ち」であり、「道、また、道を通して行く方向の意」と「……へ行く道」の両義がある。これに従って考える。

そもそも「小治田の年魚道」は、どこで切れるのであろうか。

「小治田の年魚」の「道」なのか、「小治田の年魚道」なのか。前者ならば、「小治田という大名の一部をなす小名である年魚」にある道ということになろう。後者ならば、「小治田にある（あるいは小治田を通っている）」ところの「あゆに向う道」であらう。

歴史学的にもほぼ定説化している小治田の地域と、想定されている「あゆ」の場所とは、やや離れた場所であり、小治田(大名)——年魚(小名)という関係にはならない。この点で、前者の解釈は採れないと思う。後者ならば、この点は解決する。しかし、小治田を飛鳥の地勢から切りはなした上で、「年魚道」をそのまま「あゆち」という地名と考えれば、こうした議論そのものが不要である。尾張説の可能性は、そこにも根拠をもつ。母音連結回避の問題にもつながる尾張説は、なお検討の対象となろう。

### 3 「熱田太神宮縁記」の記載

「あゆち」論をめぐるのは、『尾張国熱田太神宮縁記』にも注目する必要があると思う。この史料の性格については議論があり、西田長男氏は、「本書が偽書であることは明らか」であると断じ、その実際の成立時期は、「凡そ鎌倉時代初期、即ち源氏三代の頃おいであったのではなかろうかと思われる」と言う。「偽書」というのは、この史料自体に記述されている、貞観16年に尾張連清稻が述作したものに、藤原朝臣村梶が筆削を加えて、寛平3年に成立した（これによって、「寛平熱田縁起」とよばれることがある）という書誌学的内容



が事実ではないという謂である。<sup>(17)</sup>

これに対して、尾崎知光氏は、「編集が鎌倉期であるとしても、内容そのものは平安時代及びそれ以前のものとして十分存在価値を有する」と言う。<sup>(18)</sup>

詳論は、機会を改めたいが、私は、基本的には尾崎説に賛成である。西田氏の言う意味での「偽書」が参照・依拠したものが「偽」であったとは断定できない。一方では、古ければ古いほど史実を伝えているというものでもない。私見によれば、本書は、奈良・平安期に存在した地元伝承を(も)、採り入れている。しばしば指摘されるところであるが、『釈日本紀』所引の『尾張国風土記(逸文)』と同一の内容の記述が見られることは、さらに踏み込んで考察すべきではあるまいか。

『釈日本紀』(『万葉集注釈』もそうだが)に『風土記』の引用が見られるのは、その時代には、「和銅」の風土記が「延長」のそれかとはともかくとして『尾張国風土記』が存在しており、学者がそれを披見できたからである。『記・紀』を参照できた著書が、(国府に保存されていたかも知れない「延長」の)地元風土記を利用できなかったと断言するわけには行かない。

『風土記(逸文)』と本書の内容上の一致(文章上の不一致)から、(『風土記』そのものから一応離れて)地元になんかそのような伝承があったと解されることが多いが、『風土記』の取意文である可能性もあると思う。そもそも本書における『記・紀』は、100パーセント忠実な引き写しなのではなく、本文を構成する素材なのではないか。本書は、典拠を離れて「創作」されたというよりは、直接引用・取意作文など、「素材を編集」したという性格のものではあるまいか。

建稲種公、宮酢媛、沙門道行などの物語は、口碑を採録したのではなく、今は失なわれてしまった『尾張国風土記』に拠った可能性もあると思う。もとより、これらは伝承であり、直ちに史実を伝えるものではない。しかし、『記・紀』に記された「国家公認の伝承」とは異なる地元伝承——あゆち渦の世界の、直接的には熱田社の、「かくありたし」「かくあるべし」「かくありしか」という想念が生み出した——として、地域の特質を検討する上での重要な史料である。

そのように考えた上で、ここで採りあげたいのは、ヤマトタケルの歌とされている「風俗歌」二首である。これは、どう考えても、「あゆち渦」の世界の中で歌われる地元の歌である。

○奈留美良乎 美也礼波止保志 比多加知余 己乃由不志保余 和多良部牟加毛

○阿由知何多 比加弥阿祢古波 和例許牟止 止許佐留良牟也 阿波礼阿祢古乎

前者には、「奈留美者は宮酢媛所居之郷名今云成海」という割注が付いているが、これは、この歌をヤマトタケルが歌った理由を説明する著者による注である。また、この二首を並べることで、氷上姉子が宮酢媛であることを示唆しようとしているのであろうが、本来氷上姉子は普通名詞であろう。

この「阿由知何多 比加弥阿祢古波 和例許牟止」の「阿由知何多」について、新井喜久夫氏は、「アユチガタに住む氷上姉子」の意であることから、「あゆち渦の氷上姉子では意が通じない——つまり、渦＝海面に住むはずはないということであろう——」とし、「麻都

良我多 佐用比売の子が領布振りし 山の名のみや 聞きつつ居らむ」(『万葉集』巻5—868)を例証として、阿由知県(あがた)の存在を主張している。<sup>(19)</sup> 勿論、新井氏は、この歌謡だけで県の論拠としているわけではなく、愛知郡に三宅連が居たこと、近辺に小字の「県」(あがた)、「上田」(あがた)が見出されること、尾張連の氏族的特質などを踏まえて立論しているのだが、この「阿由知何多」が「あゆち潟」ではないとしても、「年魚市」が「あいち」ではなく「あゆち」であるとする結論に変わりはない。

私は、県の存否の問題は別として、「あゆち潟」と「氷上」は、大名一小名の関係ではなく、「あゆち潟に面した氷上の地」と解して来たし、「象徴としてのあゆち潟の世界に住む」氷上姉子という修辭的表現も考え得ると思うのだが、如何であろうか。「あゆち潟」の世界に氷上の地が包摂されるというのが、私の理解である。

ただし、「あゆちあがた」ならば、「あゆたがた」となるべきではないかとする私の指摘(『愛知県史 通史編 1』)は、誤りであって、撤回したい。

私は、「[a]は、全ての母音に対して、最広母音の位置に立ってゐる為に、[-a]以外のあらゆる他の尾母音との接続に於て、一般に脱落しないのである」という岸田俊夫説を念頭に論じたのだが、岸田氏は、「次の音節に尾母音[-a]を含んでゐる」場合には「脱落する可能性を持つ」として、「諸県——牟良加多、大県——於保加多、益荒夫——麻須良雄、大穴牟遲——大汝」を例示している。<sup>(20)</sup> 「県(あがた)」は、まさしくこれに該当するから、「あゆちあがた」ならば「あゆたがた」にはならず「あゆちがた」となる。ただし、「あゆち潟」でよいとするのが、私見である。

もう一首の「風俗歌」についても、考察しておきたい。釈読としては、  
成海らを見やれば遠し 比多加知余 この夕潮に渡らへむかも  
の傍点部以外に問題はない。

加藤静雄氏は、「比多加知余」を「火高地に」と解し、氷上の地である大高のこととした。そして「この夕潮に渡らへむかも」については、「渡り得るかどうか心配しているのであるが、これは舟の利用を証拠づけている」と結論する。<sup>(21)</sup> この解釈は、巻3—271の高市連黒人の歌の解釈と連動している。加藤氏によれば、黒人は、潮が引いた、舟の利用がむずかしいと想ったのである。

加藤氏は言う。「桜の台地(笠寺台地)と鳴海台地との間に奥深くそして遠浅に湾入した年魚市潟(鳴海潟)は、潮が引いたならばすぐ歩渡りすることが可能な潟ではない。むしろ徒歩は困難であり、舟を使用するのが渡るのに容易であろう。黒人は潮干を喜んでいないのである。」

これに対して、佐藤隆氏は、「桜に向かうその直前の年魚市潟が、潮干になったのである。黒人は潮待ちも回り道も必要もなく、直ちに桜に向かい、尾張国府に行くことが可能になったのである。それは一方において、妻の待つ都へ一歩近づくことでもあった」として、陸行か船行かで、歌意が大きく異なることに注意を向けている。<sup>(22)</sup>

私は陸行説を採るが、その点はさておいて「風俗歌」にもどる。加藤説に立って一首を解釈すると「鳴海の方を眺めると、そこは遠く感じられる。いま夕潮が満ちて来たのだが、

その鳴海すなわち火高の地へ、渡って行けるのであろうか」となろう。「ら」は、その方向を示し、「渡らふ」は渡って行く、「む」は、話し手の意志や希望を、「かも」は、疑問・反語・詠嘆の意を表すから、「渡って行きたいのだが、行けるだろうか」となる。

「夕潮」は、「夕刻に引いて行く潮」ではなく、「夕刻に満ちて来る潮」であろう。そうなる、加藤説は、「潮が満ちて来たのだが、舟で行くには、まだ浅い」と、夕潮を歓迎しつつも、それが十分ではないことを詠嘆していると読める。

しかし、この一首は、むしろ夕潮が渡り行くことを妨げていることによって、「鳴海ら」が遠くなってしまったことを嘆いているニュアンスを持っているのではあるまいか。そう考えれば、問題は舟ではない。

その点を考慮すると、「比名加知」を「直歩(直徒歩)」としてはどうかと思うのである。

「ひた＝直」は「直接」「ただち」などを表わす接頭語で、『万葉集』にも「比多氏理に」「比太照に」「直上に」「当土に」「直佐麻に」の用例がある。「かち＝徒歩」は、「歩」「歩行」である。「直徒歩」は見当らないが、馬や舟を使わずに、徒歩で行くことを表わす語として、あり得るのではあるまいか。

もし、この想定が成立しうるとすれば、一首の意味は、「夕潮が満ちて来てしまったので、干潟を直接にひたひたと歩いて行くことが出来ない。私が渡って行きたいと思う鳴海が、あんなに遠くに思われる」となろうか。

(私は、あゆち潟の一部をなしていると考えているのだが)鳴海潟は、中世においても、舟で渡るものではなかった。周知の2、3の例証を掲げる。

#### ○『十六夜日記』

熱田の宮へ参りて……書きつけ奉る歌五(この五首の中の三首は、直接に「鳴海潟」を詠む)……潮干の程なれば障りなく干潟を行

#### ○『海道記』

此浦ヲ遙ニ過レバ、朝ニハ入塩ニテ、魚ニ非ズハ遊ブベカラズ、昼ハ塩干潟、馬ヲハヤメテ急行ク……猶コノ干潟ヲ行バ

#### ○『東関紀行』

ふるさとは日をへて遠くなるみ潟いそぐ塩干の道ぞすくなき

#### ○『春の深山路』

潮干待つ間は浦隠れ居侍らむとて……かりに鳴海潟は今干始むれば、馬の蹄つくばかりに波流れてなお興あり

五十町といへども道よくて駒も早ければ、程なく鳴海の宿に着きぬ

満潮を舟で行くのではなく、潮干を待って馬で行くのであって、そこは「道」なのである。これらは、いずれも非日常的な「旅」の風景である。そして、語られているのは、馬での通行である。干始めたばかりなので、馬の蹄がつくばかり波が流れるのだが、干いてしまえば道もよくなるのだから、徒歩でも行けるということではあるまいか。

古代における一般的な民衆の暮らしの中で、陸地であれ干潟であれ、日常的な地域内の往来に馬が使用され得たか、その点を考えても、徒歩による干潟の往来の可能性は高いと

思う。「あゆち湯」は、そういう世界であった。

#### 4 「鮎市」「吾湯市」から「愛知」へ

次に問題となるのは、「あゆち」と「愛智」の関係である。

関係する史料を通観すれば、改めて考証を試みるまでもなく、「鮎市」「年魚市」と「愛智」に関連があるというにとどまらず、前者から後者への変遷が想定されるから、その変化が、何故、どのようにして、何時生じたのかを問うことになる。

地域社会における自生的な変化なのか、政治的・制度的変化なのか。また、漸次的な移行なのか、特定の時期を画期とするものなのか。

結論から言えば、この問いに対しては、和銅6年(713)を画期とする制度化に発するものと、明確に答えることが出来る。

『続日本紀』和銅6年5月甲子条の「制、畿内七道諸国郡郷名着好字」という記事と、それに関連する諸史料をどう関連付けて解釈するかについては、議論もあるところで、すでに私見も述べているが、<sup>(23)</sup>この和銅6年という時点と、郡・郷等の行政地名(河川名・人名・神社名などは対象外)を嘉名・好字・二字で表記するという制度の成立ということは動かない。

この問題をめぐっては、すでに本居宣長が『地名字音転用例』で述べていて、<sup>(24)</sup>その論旨は、なお有用である。

宣長は、二字で表記するためには、「尋常ノ仮字」では無理があり、「字ノ本音」のままでは、その「名ニ叶ヘ難」いために、やむを得ず「音ヲ転用シタ」のだと言っている。この説明は誤っておらず、地名表記に音訓混用(いわゆる「重箱読み」や「湯桶読み」)が目立つのも、その故であると考えている。

そして、宣長は、「イノ韻ヲユニ用ヒタ」例として、他ならぬ「愛智」をあげ、「愛ヲアユニ用ヒ」たもので、「吾湯市・年魚市」を二字表記するために「愛」の音を転用して「愛智」としたものだとしているのである。『和名抄』で「阿伊知」と注するのは、後に訛ったのだとも言っている。この説明は、平川南氏とは正反対であるが、宣長が正しい。

ちなみに、宣長は「イノ韻ヲユニ用ヒタ」例として、相模国愛甲郡をあげている。「愛甲」は「阿由加波」で、「甲ヲカハニ用ヒタ」ともする。愛甲については、『和名抄』の名市博本に「アイカフ」の訓があるが、東急本では「阿由加波」、『延喜式』(巻22民部上)の享保版本に「アエカワ」、内閣文庫本に「アユカワ」とある。「承和二年六月二十九日太政官符」(『類聚三代格』巻16)を参照すれば、愛甲は元来は鮎河であったと推定できる。同官符に見える飽海河は、現在の豊川である。当時の地名では、参河国渥美郡に河口があったが渥美河とは呼ばれていない。渥美郡は、飽海郡の表記変更されたものであって、当初は渥美と書いて「あくみ」と訓まれたものが、訛って「あつみ」となったことが、史料的にも確認できるが、河の名は変更対象でなかったから、飽海河は維持されたのである。鮎河についても、事情は同じである。

Wikipediaは、愛甲郡の解説で、「古くは『あゆかは』と読んだ。この地名は後に『鮎川』『愛

川』の地名が派出する源となった」としているが(2020年5月18日閲覧)、半分は正しく、半分は間違っている。鮎川(鮎河)は、愛甲に先行するのである。

なお、石神遺跡出土の木簡に、

(表) 鮎川五十戸丸子ア多加  
(太カ) □島連淡佐充于食同五(十戸カ) □□三枝ア□  
(五十戸莫須カ)  
 (裏) □□ア□□□□□  
 □ア白于食大野五十戸委文ア代□

(『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』17 2003年、釈文訂正・『同』22 2008年。)がある。ここに記された鮎川五十戸、大野五十戸は、『和名抄』等に所見がなく、丸子部・大島連・三枝部・委文部という人名から地域を推定することもさしあたりは不可能だが、この二つの五十戸＝里が、天武朝から持統朝にかけての時期に、鮎川(鮎河)評に属した可能性も、否定することはできないであろう。

この宣長の主張は、木簡や正倉院文書等の実態史料によっても裏付けられる。この点については、すでに旧稿において論じたところであるが、念のため要点を述べる。

「あゆち」史料の下限は、『神亀三年(726)山城国愛宕郡出雲郷雲上里計帳』の「出雲臣人足 年参拾肆歳 正丁 和銅五年逃 尾治国鮎市郡」という逃注記である。神亀3年の史料に「鮎市郡」と記されているのだから、神亀3年が下限であると考えがちであるが、ここでは、和銅5年(712)の逃亡という記載に注意しなければならない。それに「尾治国」というのは、古い表記で、遺存使用例であることも考慮に入れたい。

計帳は毎年作成されるが、和銅5年のこととして記入された、鮎市郡への逃亡を、連年機械的に引き写したものであろう。<sup>(25)</sup> 年令の方は毎年変わるわけだから、逃亡者のそれも改めたであろう。人足は、逃亡時には20歳だったことになる。

以上によって、「鮎市郡」表記の下限を、和銅5年と判断することにしたい。

「愛智」の初出史料は、天平15年(743)5月9日の、「荒田井直族子麻呂の得度申請の解」(『正倉院文書』)である。『和名抄』では「愛智郡」であるし、『正倉院文書』でも、「愛智郡」と記す。

しかし、『平城木簡』では、既出の限りでは「愛智郡」は見出されず、7点の「愛知郡」が存在する。そして、年紀を明記する木簡の初出は、

(表) 尾張国愛知郡 物部里白米□  
 大□三斗

(裏) 和銅七年二月十七日

であって、和銅7年(714)が、「愛知郡」の上限となる。

つまり、「あゆち」の下限は和銅5年であり、「あいち」の上限は和銅7年である。そして、地名表記変更は、まさしくこの間の和銅6年のことであった。

「鮎市・阿由市」から「愛知」への変更は確実なのだが、「愛智」と「愛知」の関係は、旧稿でも述べたように、解決がつかない。客観的事実としては、既出の木簡の表記は、全て「愛知」であり、「中寸若倭部大嶋」が郷里不明なことと、やや問題のある

□□郷戸主□

(尾張カ) (愛知カ)  
 □□国□□郡

を除けば、それらは「里制下」の時期に属する。一方、正倉院文書は「郷制下」のものである。旧稿においては、神亀3年口宣によるとの仮説を述べつつも、『続日本紀』に「愛知」とあることの説明がつかないとしたが、それ以外の「六国史」の表記は「愛智」であること、『続日本紀』の1箇所が唯一の例外であることを踏まえて、これをいわゆる「続日本紀の杜撰」の一例とし、神亀3年口宣の仮説を維持しておきたいと思う。ただし、「知多」と「智多」は時期を同じくする木簡で並存している。また、史料としての性格は異なるが、『日本<sub>霊異</sub>記』では、阿育王にちなむ阿育知郡の他「愛知郡」と「愛智郡」が並存する。

『和名抄』に見える愛智郡の郷は、東急本によれば、中村・千竈・日部・太毛・物部・厚田・作良・成海・駅家・神戸の十郷である。天理図書館本(旧高山寺本)は、駅家・神戸を欠いて、厚田ではなく熱田と記し、名市博本は、十郷だがやはり熱田と記す。厚田について論じる向きもあるようだが、これは熱田とするのが素直であろう。尾張国全体の郷数としては、東急本が69、名市博本が65、高山寺本が62郷である。

これに対して、『古律書残篇』が、尾張国は、「郡八 郷百九 里三百一」としており、郷・里とあることから(郷里制が施行されていたのは、霊亀3年～天平12年)、8世紀の事態を示しているのではないかと考えられている。とすれば、8世紀から10世紀にかけて、郷は再編・統合されたということになる。

事実、正倉院文書や木簡には、「和名抄」不載の郷・里名が散見される。典型的なのは智多郡で、『和名抄』の番賀・贅代・富具・但馬・英比の5郷すべてが木簡で確認され、阿具比→英比の変遷が確認されるとともに、御宅里・大御野里・入見里・口里(他に入海郷があるが、これは入見里と同所と考える)と、ほぼ半減したと考えられるのである。

愛知郡に限って見ても、正倉院文書に荒大郷が見え、木簡に荒大里・余戸里・油口里が見えることは、『新修名古屋市史』で述べた通りであり、荒大里についての考証も誤りないと思う。「荒大」が、訓音混用のいわゆる湯桶読みであるのは、他にも例の見られる二文字化のための苦勞の結果であろう。なお、荒大を知多郡の荒尾につながると見る説もあるが、荒尾は「あらを」であり、荒大なら「あらお」になることを付記する。

正倉院文書に見える「愛智郡大宅郷」を『和名抄』の太毛郷とは別郷と考えたのは、誤認であった。その後に出土した石神遺跡出土の木簡で、それが確かめられる。

物部五十戸人 「□□  
 大家五十戸人 □□  
 日下五十戸人 □□」

(「飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報」17 2003年)

物部・大家・日下は、『和名抄』の「日部・太毛・物部」に対応し、ひとつながりの地域をなすことが暗示されている。「太毛」は「おおけ」ではなく、太毛・大宅・大家は、同じ「おおやけ」である。太毛郷が東条に属することも、判明した。これはこれで、私見を補強する。物部・日部(日下)も東条である。三者は隣接する。北から南へ(あるいは南から北へ)、東から西へ(あるいは西から東へ)、三角形の位置に、など。東西は考えにくい、日部

郷の位置が悩ましい。『万葉集註釈』所引の『尾張国風土記(逸文)』があるからである。

同書は、福興寺について「俗名三宅寺十四歩南去郡家九重 在日下部郷伊福寺」とするが、これは「南去郡家九里十四歩……伊福村」の乱筆・誤記と考えられている。吉田東伍氏は、「南去郡家九里」によって、「厚田の郡家(今神戸町と云ふ)の北九里(今路一里八町許の地点)」とするが、これは、福興寺から南へ九里の所に郡家があると読んでいるのである。郡家が熱田付近にあった可能性は、尾張氏の状況などからあり得ることだから、この位置関係が成立すれば、収まりはよいのだが、私には、「南へ郡家を去ること九里」としか読めない。郡家は日下部郷の北に在るのである。そうすると、郡家は愛智郡の北部に位置すると考えるか、日下部郷を熱田よりも南に想定する他はないのだが、これはこれですっきりとしない。さしあたり思い付く「解釈案」は、いずれ錯簡があるのだからと割り切って、「郡家南去九里」と復元することだが、そこまでの改変は認めがたいのではなからうか。

木簡で出現したのは、「余戸里」と「油口里」である。余戸里は、論理的にはあり得る里だし、『和名抄』でも、東急本には春部郡と山田郡に余戸郷がある。その構成原理からすると、郡内の縁辺部の可能性があると思うが、いずれの郷に統合されたかを含めて不明である。

油口里については、「ゆくち」と読めば重箱読みとなり、和銅6年から霊亀3年の間の木簡とも考えられるが、奈良文化財研究所編『改定新版日本古代木簡字典』(八木書店 2013年)に照らして検討すると、「油江里」とする可能性も否定できないと思う。(読み方の問題と時期の関係は油口に同じ)

そうすると、明治15年の町村字名調査で上中村村に油江が見えること、後述の『千代氏荘坪付注進状案』に、千竈郷の北あるいは東方向に位置すると思われる油江里が出ることが注目される。

木簡の油江里は、郷レベルの里であり、注進状のそれは、より下位の単位と思われるのだが、郷レベルの油口里は、中村郷に統合されたと考えることも出来よう。(『新修名古屋市史』では、これを千竈郷と誤記している——660・578ページともに——が、これは私の大失態であり、「中村郷の南方に千竈郷を想定する」という叙述とも矛盾する。)

千竈郷の位置はどこなのかということは、古代愛知郡＝私の言う「あゆちの世界」を考察する上で、かなり重要な意味を持つと、思っている。まさに、その点について、私見への批判も寄せられているので、批判にもお答えしつつ、論じていきたい。

## 5 千竈郷の位置をめぐる

私が、千竈郷の位置を推定するのに『和名抄』の記載順序を根拠にしているという批判があるようだが、これは誤読である。私は、まず先に千竈郷の位置を想定した。そして、そう考えると、郡の北東(これが西北の誤記であることは一見して明らかだが、これも、私の失態である。)部から、中村・千竈、南部の熱田・作良・成海は、『和名抄』の順序で確定できるとし、千竈の南に郷を想定するのは無理だから、日部・太毛・物部は熱田の東北方面から、この順に並ぶものと仮定したのである。そして、日部の位置の如何によっては、全体の関係が変わるし、『万葉集註釈』所引の『尾張国風土記(逸文)』を生かそうとすれば、

郷名記載順の仮説は崩さねばならないとし、「記載順にこだわらない場合には」とも述べている。焦点は千竈郷の位置であり、批判もここに集中しているようだが、それについては、後述する。

『新修名古屋市史』において、新井喜久夫氏は、「千竈郷は8世紀以前、笠寺台地にあったと推定される」とし、私は、「律令制成立期には、笠寺台地にあった可能性がある。……『和名抄』の頃から中世以降の地名としては、中村郷の南で、現在の中村区から中川区にかけて立地していたものと思われる」と記している。

仄聞するところでは、この点をめぐって、新井氏の主張と知我麻神社が星崎村に鎮座することを無視できず、(苦しまぎれに)時代を限定して論じたと、私見を批判する向きがあるとのことである。

新井氏と私が、このような書き方をしているのは、市史という著作物の性格上、内部において異なる見解を提示するのではなく、最低限の一貫性を保とうとしたためである。ここでは、「8世紀以前の千竈郷」についての私見を述べることにしたい。

新井氏の主張を見よう。「上・下知我麻神社はいま(熱田社の)境内摂社となっているが、かつては神名よりみて、愛智郷千竈郷に鎮座していたものとみてよい。千竈郷は8世紀以前、笠寺台地にあったと推定される。」これが結論である。その論拠は、本地村の星宮社の北にある小祠が上・下知我麻社であるという『尾張志』の記載のみであって、熱田へ移ったのちも旧跡に名残りをとどめているのであり、「星宮社の境内がかつての上・下知我麻社のどちらかの社地であったと思われる。星宮社の位置は笠寺台地の先端」であると、これが全てである。

実際のところ、『尾張志』はどう言っているか。星宮社の項では、「本地村にあり」と言い、上知我麻社の項では、「星宮の同地星のやしろの北の方にあり」、下知我麻社の項では「同所にあり……此処にてはしめて塩竈を作り海潮を焼て塩つくる事を教へたる人を称たる神名也」「千竈といふハ本地村をはじめにて戸部山崎笠寺南野牛毛荒井七村を総いふ郷名也」と述べる。(以上「愛知郡」の部)

上知我麻神社の項では、「市場町に東面に坐す」「この知我麻といふは当郡中の地名にて正字は倭名抄に千竈と見え其地ハ今の星崎荘 戸部 山崎 笠寺 本地 南野 牛毛 新井 七村なりと呼郷の古名なり此社もとハ本地村あたりに坐けむを後此処に移し祭れるなるべし」、下知我麻神社の項では、「大宮鎮皇門の外北の方に西面に坐す」「この社もいと上古には下千竈といふ地にましまししを後に此処に移し奉れるなるへしされども遷座のとしころはいつとも知るへきよしなし」と述べる。(以上「熱田」の部)

『尾張志』の記述には、事実(本地村の星宮に上・下知我麻社があること)の他に、推論(「なるへし」)が含まれている。その推論を支えるのは、境内摂社とは別に、本地村に上・下知我麻社があるという一事である。千竈が、7ヶ村をまとめた郷名、今の星崎荘の古名であることは断定的に述べているが、口碑の存在も示唆していない。

千竈が正字だというのは逆で、この表記は二字化のための宛字である。『尾張志』は、明らかに千竈から塩竈を連想しているが、奈良時代の伊勢湾沿岸部で行われていたのは土器



製塩であって、多くの竈＝千竈が思い浮ぶはずもない。さらに言えば、近年の考古学の成果によれば、笠寺台地国辺の遺跡では、製塩土器が出土するものの、それは消費地における土器使用を裏付けるもので、8世紀におけるこの地の製塩は認められないというのが定説化しつつある。

この地における製塩・塩竈の出現は、中世末から近世にかけてのことなのである。そうした光景が一般化した後に、『和名抄』にも見える千竈郷の名が想起され、それをこの地に付会しようとする動きがはじまったと見るべきであろう。

本地村の知我麻社は、このような事態の中で、新たに案出された「千竈郷」論を補強するべく、熱田摂社を勧請・分祠したもので、ベクトルは、『尾張志』の推定とは逆なのではあるまいか。

私は、『和名抄』段階やそれ以前における千竈郷の位置を笠寺台地辺に求めることは、単に地名の問題にとどまらず、この地の古代史像の構成を誤らせることになるのではないかと考えている。

それでは、知我麻とは何なのか。現段階では、それは不明と言う他はない。そもそも、「ち・かま」なのか「ちか・ま」なのかも分らない。ただ、千竈と連動させてはならない。二文字にあたっては、本来の意味とは無関係に文字が宛てられた。味蜂間→安八、林→拝師、穂→宝飫（これは、後に誤記されて宝飯となり、訓も「ほい」となった）、神→美和、二字から二字の場合でも、飽海→渥美（これも、訓が変化してしまった）など、そう言えば、鮎市→愛智も、「愛」や「智」を遡らせての意味付けは不可能である。

知我麻の場合には、神社名は残ったために、二文字化以前の地名が推定できることになった。これと似た例に、参河国播磨郡の久麻久がある。『和名抄』には「能束」とあるが、西隆寺出土木簡によって「熊来」であることが確かめられた。久麻久神社の存在から、地名表記が久麻久→熊来と改められたことがわかるが、これは字義とは無関係の宛字である。幡豆郡に熊が出没するわけではないだろう。「能束」が『和名抄』の誤記にとどまるのか、変化してしまったのか、今のところ判然としない。

吉田東伍氏は、千竈郷を、「今詳ならず、熱田町の南偏を云ふ歟、上知我麻社在り」とし、「旧説山崎、笠寺、星崎の辺歟と云へど採り難し、星崎の辺は正しく作良郷とす」と説く。（『大日本地名辞書』）『尾張志』を引用しているが、その引用部分には、吉田氏の言う「旧説」が述べられている。ところが、少しわかりにくいのは、『尾張志』の「上知我麻といふ社の、今は此熱田にましますによりて熱田に千竈荘といふ名さへ負はするは、古書にそむける近世の妄事也」を掲げながら、その「近世の妄事」を注釈抜きに記していることである。私見によれば、この旧説なるものも、吉田案も、「近世の妄事」と言うべきものである。作良郷については、吉田説を採りたい。

『新修名古屋市史』の拙稿に対しては、山田寂雀氏が批判を寄せている。<sup>(26)</sup> 山田氏は、「第1巻についてはよくもこう多くの問題点を羅列し、仮説を持ってばったばったと決断をくだしているものよと感服する」と言うが、この「感服」が、『広辞苑』に見える語釈のそれではなく、同辞書の「感心」の第二用法「(反語的に)ひどさにあきれること」の謂であることは、

文章全体のトーンから明らかである。氏は、「全体についての批判は到底紙数の都合で論ずることが出来ないが、名古屋といえば熱田社の創祀に絡んで律令時代前後の地方豪族の動向がまず問題となろう」と言いつつ、何故かその点については全く触れることなく、「千竈郷と新溝駅の位置のみを論じている。この部分は、私の執筆であるから、私の責任でお答えしなければならないと思う。

なお、山田氏は、文章の末尾に、「問題となったあたりの第1巻の執筆者は福岡猛志氏と聞いている」と記す。『新修名古屋市史』は、第1巻に限らず、すべての章・節について、執筆者を明記している。山田氏は巻末を確かめる労をとらぬ人かなどと皮肉を言うつもりはないが、揶揄に等しいようなレトリック(?)は、私の採るところではない。以下内容に入る。

「この作意を私たちはどう読みとるかである」と山田氏は言う。「作意」とは、「ことさらに手を加えること。こしらえること」の意であり、「作為的」とは、「わざとこしらえるさま。また、故意にそうしたことが明らかで不自然なさま」を表現するものである。(『広辞苑』)山田氏は、私説が、自分に都合がよいように事実をねじ曲げ、こしらえごとを以て論じていると考えているのである。しかし、この「作意」にかかわって、私は「千竈・字千竈浦の呼称が残っているのは中村郷自身、千竈郷に統合された所以」とは、一言も言っていない。先述の通り、中村郷とすべきところを千竈郷と書いているケアレスミスがあつて、それが山田氏を惑わせたとすれば、その点はお詫びしなければならないが、それでも、山田氏の「引用」のようにはならない。また「作意」は「越知里は、鎌倉円覚寺文書の富田莊絵図に記載されていて、ここは『現中川区横井町付近』と比定」したことにあるのか、「千竈郷の位置を中村町から近鉄、J Rライン辺としている」ことにあるのか、不分明である。(この「中川区」が「中村区」の誤植であるという山田氏の指摘は、横井町に限定すれば、正しい。横井の地名は中川区にまで及んでいるが、私の不注意であつた)

私は、弘安5年(1282)『尾張国千代氏莊坪付注進状案』に見えるいくつかの地名の記載順序に一定の基準があり、前後が入れ替ることがないことを確認し、千竈郷とされている里がひとつながりになるように置き、それぞれの組み合わせの中で、前後に記されている里は上一下に置き、全体としての位置関係に矛盾がないという三つの条件を満たすものとして作成した概念図を示した上で(『市史』第1巻 660ページ 図7-2)、「この概念図は、そのまま、中村町から近鉄、J Rのラインあたりまでに、はまることになる」とし、『和名抄』郷においても、中村郷の南方に千竈郷を想定するのは、自然であると言えよう」と論じたのである。この概念図の「霜麦」以下が千竈郷なのだから、その上部にある「油江」が中村郷なのである。

私見を批判した上で主張される山田氏の文章は、私にはきわめて分りにくく、意味も理解できない点もあるのだが、次のようにまとめることができようか。

笠寺段丘の塩浜近くに成立した「千竈郷の本所」(千竈とは塩屋を連想させる)は、「大高のミヤズ」の地盤であり、千竈郷の祖神はオトヨとマシキトベで、『和名抄』の前後に、その勢力は稲葉地近辺まで及んでいたから、千竈信仰の社が、その地にあっても不思議では

ない。

要するに、千竈郷の祖神であるオトヨとマシキトベを奉じる勢力が、稲葉地方面まで進出したために、その地に千竈信仰が拡がったことで、関係地名が残ったまでだというのである。

私は、千竈関係地名を千竈郷の遺称であると見る。山田氏は、『和名抄』の頃までに)勢力が進出したと言う。私は、『市史』においては、千竈と塩竈との関連を否定する見解を述べていないから、山田氏が、千竈と塩屋の連想を以て私見への批判をすること自体は、ありうることだと思うが、オトヨとマシキトベと製塩の関係を言う説の存在は、寡聞にして他に知らない。山田氏の批判は、論証されていないと思うが如何か。

新溝駅についても、山田氏は、分かりにくい批判を展開する。まず、私が「一带の遺跡から馬骨や、都城使用の土器が発見され、飛鳥・藤原京と共通のへら描き文字も出土する、古渡付近ではないかとする通説に戻っておくのが、現段階では、無理が無さそうである」と述べていることに対して、「俗説の金山付近だとしている(傍点は福岡)」と言い、「他に西区押切付近説もある。市史ではそれを新道付近と称し、『享保年間、伝馬役が居住していたから駅があったとする伝承にすぎない』としている」と批判し、「新道説は何をもって計上したのであろうか」と言う。「計上」という日本語の適否はさておき、「新道」説は、私が主張したものではないことは、文脈から明々白々であると思うし、「伝承にすぎない」ということは、私は言っていないし、誰も言っていない。

私が、「西区新道に新溝をあてる説」としたのは、厳密に言えば、明治17年地籍図において、「下浅間町・江戸屋町・奉行人町・新道町などの町に蚕食されたような形で5ヵ所に分れている」「南駅町・北駅町」をそれとする金田章裕氏の説である。

この金田説は、京都大学の藤岡謙二郎氏を代表として行なわれた全国的な駅路の調査結果をまとめた『古代日本の交通路Ⅰ』(大明堂 1978年)に収められたもので、影響力の大きいものであった。

この南北の駅町というのは、古代の駅の遺称なのではなく、江戸時代に出現した地名であることから、古代駅家の証明にはならないと述べたのである。金田氏の主張が、「伝説」であるはずはない。

山田氏ご自身は、新溝駅＝押切説を採っているようだが、『徇行記』に、「馬喰町ハ慶長・元和ノ比馬口旁 二人住ス 因テ名トス コレハ白壁町ノ西ニアリ」とあるのが、「駅址らしき可能性を秘めた論拠であった」というのは、文章的にも内容的にも理解に苦しむ。ここで問題にしているのは、律令時代における駅家の存在なのであって、江戸時代の馬喰が出て来ても困るのである。

さらに、山田氏は「この辺は名古屋城を境にして洪積層の西北にあり、かつて柳原辺より、この洪積層沿いに迂回して西へ大河が流れていたのが、後の泥江や土江などと呼称され、更に新溝の地名を生んだという論拠がある」とする。河道の存在、その変遷は、それ自体として研究されるべきことだし、この地名論は、氏がそれを論拠としていることは分かるが、客観的に論証されたものではないように思われる。

氏は、一方では、「泥江、土江、油江は同じ信仰、同じ祖神を持つ範疇にあったことは千竈信仰と同じと言えよう。泥江は広井の訛語である。(中略)千竈信仰は熱田社との関係が深い」とも言う。氏が参照を求めている「名古屋市内の古東海道再考」(『郷土文化』巻44—1号 1989年)では、「新溝とは新屋、新江と同意義で、開墾された新開地を指すもので、その所在は名古屋市の北・西部のいずれかにあった」とし、別のところでは「新溝(草津)」と記す。そして、古東海道と対比して、それよりもかなり南西にずれる鎌倉海道のルートとして、「井戸田、大草、古渡、露橋、米野、中村、草津」をあげているから、ここでは間接的に、新溝＝古渡説を否定していることは確かであるが、山田氏の古東海道論は、十分に証明されているようには思われない。

なお、木下良氏は、東海道筋と鎌倉海道を同ルートとする前提に立って、検討している。第6回春日井シンポジウムにおいて発表されたこの見解は、森浩一・門脇禎二編『旅の古代史』(大巧社 1999年)に収録されている。

木下氏は、金田説を否定した私の見解を承けて再検討するとして、明治17年地籍図を分析した。その結果、愛知県米野村一帯に、各地の古代道路の跡によく見られるのと同じ幅10メートルから15メートルほどの帯状の地割があることを確認し、旧鎌倉街道と推定される直線的な道路が旧露橋村において折れ曲っていることを根拠に、この地点付近に新溝駅を想定する新説を提起した。

この説は、木下良『事典 日本古代の道と駅』(吉川弘文館 2009年)においても、地籍図とともに述べられている。

梶山勝氏は、考古学の成果を踏まえて、熱田台地の正木町遺跡群に注目し、愛智郡家は正木町遺跡を中心とし、新溝駅家は古沢町遺跡の南部から金山北遺跡を中心に所在した可能性があることを指摘している。露橋説と並ぶ有力学説だと思うが、いずれにせよ、福興寺＝日下部郷の位置問題の「解決」が、課題であると思う。

なお、旧稿(『新修名古屋市史』)を執筆した折に、三渡俊一郎「愛智郡の郷域と新溝駅について」(『郷土文化』第40巻第3号、1986年)が、金田説について、「南駅町・北駅町を古い地名と誤認して新溝駅に比定した。また、この説を無批判に受け入れる書物も多い」と指摘していることを見落としていた。拙稿に論及されることが多いが、金田説批判のプライオリティは、私にではなく、三渡氏のものであることを明記しておきたい。

## むすびにかえて

私は、あゆち潟とそれを取り囲むようにつながる、律令時代以来の愛智郡の一带を、両者不可分の関係にあるものとして、「あゆちの世界」と呼びたいのだが、それは、尾張国内の他の地域とは共通性を持つのは当然としても、相対的に独自の性格を有するひとつのまとまりのある世界であると考えているからである。

同時に、その内部も一様ではなく、それぞれに個性をもつ、いくつかの小地域に分かれるように思われる。文献史料はきわめて限定的だが、量的な拡大とあわせて精緻化も進み、理論・視座も豊かになっている考古学の成果に学ぶならば、(発掘調査の地域的偏在とい

うことを考慮に入れるとしても、なお)熱田台地の「卓越性」は大きく、中村郷・千竈郷一帯、瑞穂台地から笠寺台地にかけての一带、鳴海・大高・(現東海市の)名和を結ぶ一帯の、それぞれについての特性を検討する必要があると思う。

私たち文献史学研究者は、しばしば、提示される「考古学上の事実」に納得してしまうことがあるが、考古学の成果に学ぶということは、単なる「丸呑み」や「つまみ食い」をすることではあるまい。個々の研究者の認識や主張を含む学界の達成を、その論理に即して検討することだと思う。

「遺跡・遺物として語らしめる」というのは魅力的な言葉だが、遺跡・遺物を媒介にして、研究者自身がその認識を語っているのだということは自明の理であって、「語らしめる」手法・論理にまで分け入って検討しなければならないであろう。

遺跡・遺物は、発掘調査の結果、我々の前に資料＝史料として姿を現わす。(遺跡は、発掘をしないでも、資料として意味をもつ場合がある。たとえば、古墳における墳丘測量など)発掘は、遺跡破壊でもあるわけだから、発掘者の責任は大きい。

遺跡そのものと、それとのかかわりにおける遺物の在り方＝出土状況は、直接の発掘担当者以外にとっては、発掘当事者の、観察・認識・記録が頼りなのである。その記録が、客観的事実を伝えていることが、前提となる。

都合の良いところだけの「つまみ食い」は、しばしば批判の対象となるが、私は、「丸呑み」批判も大切だと思う。史料批判は、文献に対してのみ必要なのではなく、考古史料に対しても必要である。批判的検討は、論者の主張について行われるだけではなく、その論拠となった「事象・事物」についても、行われなければならない。そこに、「ものが在る」ということは厳然たる事実としても、「どのように在る」のかの正確な把握は、「なぜ、どのような理由でそこに在る」のかを追求するための前提である。史料批判というのは、「偽を排する」だけでなく、「真を見出す」営みでもあると思う。

「あゆち潟」の検討を前提に、「あゆちの世界」を論じるのが次稿の課題となるが、それに向かうための自戒として、いささか観念的ではあるが、敢えて述べた次第である。

## 注一覧

- (1) この由来そのものは間違いではないが、厳密に言えば、「愛知県」という県名は、直接的には、「尾張国の愛知郡」という郡名に由来するものであって、この郡名が、遡れば「あゆち郡」にたどり着くのである。明治の廃藩置県に際して、尾張部に置かれた名古屋県と三河部に置かれた額田県を統合して1つの県にした時に、愛知県という名称が採用されたのである。それ以前は、尾張と三河は別の国であって、1つにまとまった「県域」のごときものが、前提的に存在していたわけではない。『愛知県史 通史編 6』(愛知県、2017年)参照。
- (2) 「あゆち」が「あいち」ではないこと、「あゆち郡」が「あいち郡」に変化する理由については、かつて論じたことがある。(拙稿「年魚市郡と年魚市潟－古代尾張地名をめぐる一考

察－』『日本福祉大学研究紀要』第100号・第2分冊、1999年）基本的な論旨に誤りはなかったと思うのだが、論じ足りなかった面もあるので、その点については、煩を厭わず補強しておくことにした。なお、「あゆ」の語義にかかわる「5 あゆち渦をめぐって」の部分は、新しく補強すべき知見や見解があるわけではないので、手を加えることはせず、現時点での私見として再確認しておくこととする。

- (3) 旧稿「知多半島古代史像の追及・試論」（『知多半島の歴史と現在』16、日本福祉大学知多半島総合研究所、2012年）において、現段階で私が最も信頼できると考えた、森勇一氏原案による想定図と、万葉学者のそれとして、加藤静雄氏の想定図を引用・掲出した。そして、加藤氏の想定図がそのまま『東海の万葉歌』（おうふう、2000年）にも採録されていること、しかし、この想定図では、現東海市域に密集する古代遺跡や、氷上姉子神社・カブト山古墳などが、全て海中に没してしまうことを指摘しておいた。その後、和田明美「持統太上天皇三河行幸と万葉集」（犬飼隆・和田明美編『語り継ぐ古代の文字文化』（青簡社、2014年、所収）においても、『東海の万葉歌』（同書では、この想定図が加藤氏のものであることは、触れられていない）からの引用として、同図が掲載されている。
- (4) 笹原宏之「国字の発生」（平川南・沖森卓也・栄原永遠男・山中晃編『文字と古代文化』5、吉川弘文館、2006年所収）。なお、松本宙「『アユ』と『ナマズ』－国字と国訓－」（『宮城教育大学国語国文』9）を披見し得ていないことを、お詫びしたい。
- (5) 柳田国男『地名の研究』（『柳田国男全集20』ちくま文庫版、1990年、初刊は1936年）。
- (6) 平川南『新視点古代史 日本の原像』（全集日本の歴史2、小学館、2008年）。
- (7) 岸田武夫「上古の国語に於ける母音音節の脱落」（『国語と国文学』第19巻第8号、1942年）。
- (8) 橋本進吉「国語の音韻構造の特質について」（『国語音韻の研究』岩波書店、1950年所収）。
- (9) 大野晋「万葉時代の音韻」『仮名遣いと上代語』岩波書店 1982年 所収（初出『万葉集大成6』平凡社、1953年）。
- (10) 片山武「『紀州本万葉集』について」（犬飼隆・和田明美編『語り継ぐ古代の文字文化』青簡舎、2014年所収）。
- (11) この史料には、多くの写本があり、写本によって表題も異なり、書誌的な記述にも違いがある。ここでは、一般に流布している「群書類従」本の表題を用いた。「群書類従本」以外にも、『神道大系 神社編 熱田』所収本・『熱田神宮史料 縁起由緒編』所収本があるが、『愛知県史 資料編6』（愛知県、1999年）にも、収められている。西宮秀紀「『尾張国熱田太神宮縁起』写本に関する基礎的研究」があり（『愛知県史研究』第4号、2000年）、西宮氏による校訂文と詳細な校異調査がある。「『尾張国熱田太神宮縁記』校訂文及び校異一覧」（『愛知県史研究』第6号、2002年）
- (12) 岸田武夫 注(7)所掲論稿。
- (13) 沢瀉久孝『万葉集注釈 巻第13』（中央公論社、1964年）
- (14) 松田好夫「小治田の年魚道の水」（同氏編著『東海の万葉』、桜楓社、1976年）。

- (15) 加藤静雄『万葉の歌 12 東海』(保育社、1986 年)。  
 (16) 伊藤博『万葉集釈注 7』 集英社、1997 年。  
 (17) 西田長男「尾張国熱田太神宮縁記」(『群書解題 第 1』 続群書類従完成会、1960 年所収)。  
 (18) 尾崎知光「尾張国太神宮縁記について」(『説林』 1967 年)。なお、『尾張国熱田太神宮縁記』(『熱田神宮文化叢書第 1』)は、群書類従本(版本)の本文と訓文、尾崎前掲論文を解説とし、西田論文に尾崎氏の注を付して付録としたもので、極めて便利・有益なものである。  
 (19) 新井喜久夫『新修名古屋市史 第 1 巻』(第 5 章、1997 年)。  
 (20) 岸田武夫 注(7)所掲論稿。  
 (21) 加藤静雄注(15)所掲論稿。  
 (22) 佐藤隆「桜田・年魚市潟」(市瀬雅之他『東海の万葉歌』、おうふう、2000 年)  
 (23) 拙稿「古代行政地名の表記原則をめぐる一考察」(『現代と文化』第 122 号 日本福祉大学福祉社会開発研究所 2011 年)。同稿において、私は、これまで必ずしも明確に位置づけられてはいないように思われる関連史料を検討し、以下の提言を行なった。  
     ① 和銅 6 年 5 月丙子条の典拠となった原態(おそらくは太政官符)は、「凡諸国部内部里等名、並用二字、必取嘉名」であること。  
     ② 『出雲国風土記』の「靈龜元年式」は鎌田説により、靈龜 3 年に改められるべきこと。  
     ③ 同じく「神龜 3 年民部省口宣」は「嘉名」とは「好字」であることを明示したものであること。  
     大宝令施行にともなう、評→郡の改定をふくめて、実態史料は、これで全て矛盾なく解釈できると思う。なお、この表記改定は、「風土記」撰述命令とは、相対的に区別される(一方は制度であり、他方は事業である)ものであろう。  
 (24) 本居宣長「地名字音転用例」(『本居宣長全集』第 5 巻)、筑摩書房、1970 年)。  
 (25) 野村忠夫「律令の行政地名の確立過程－ミノ関係の木簡を手掛かりに－」(井上光貞博士還暦記念会編『古代史論叢』(中巻、吉川弘文館、1978 年所収)  
 (26) 山田寂雀「千竈郷の比定で市史に反論」(『郷土文化』第 53 巻 3 号 1998 年)。

## 付記

『新修名古屋市史』について、その全体的当否は別として、きわめて初歩的なミスをしているので、お詫びを兼ねてその点に触れておきたい。

第一。単純なミスなのだが、弊害もあったことで、榎撫駅の故地を桑名市としてしまった。多度町戸津であることは自明の定説と認識していたのだが、多度町が桑名市だと思い込んでいたのである。今日では、多度町は桑名市と合併しているから目立たぬミスとも言えようが、この記述を「信じた」春日井シンポジウムの関係者が桑名市中心部に榎撫駅を置く地図を作ってしまった。岡田登氏が私信で指摘して下さるまで、このミスに気付いていなかった。岡田氏に感謝する。

第二。鳴海廃寺の出土瓦について、十分に確かめもしない早とちりで、筆を滑らせてしまった。梶山勝氏が、論文の中で、私見の誤謬にも論及して下さったが、汗顔とともに感謝したい。梶山勝「鳴海廃寺の創建年代をめぐって」(『名古屋市博物館研究紀要』第28巻2004年)。

第三。これは、私の勉強不足のため管見が及ばなかった結果で、「多度神宮寺資材帳」の賢璟の署名を自署としてしまったこと。荒田井一族の地元での役割論に大きな影響を及ぼすものではないと思うが、論稿の瑕であることは間違いない。直後に気がついたが、「後の祭り」、教訓としたい。